

キューバ農業レポート⑧

協同組合農場の動向と課題

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

キューバの農業の担い手・生産形態は、国営農場から非国営部門へとシフトしつつある。そして、このところ独立自営農民が増加しているとはいえ、非国営部門の多くは協同組合農場が占めている。今回のキューバ訪問では残念ながら協同組合農場の現場に足を運ぶことができなかったことから、その事例を具体的に紹介することはできないが、抽象的にはなってもその動向と抱えている課題について触れておきたい。同時に、独立自営農民による取り組みであるが、日本にはいないハリナシツバチの養蜂について紹介する。

◇課題を抱える協同組合農場

協同組合農場には生産基礎単位（UBPC）、農業生産協同組合（CPA）、信用サービス協同組合（CCS）があるが、統計上の区分は「国営農場」、「UBPC」、「CPA」、「CCSおよびその他の小農」となっており、その他の小農についての数値が把握できないため、協同組合農場が全体に占める正確なウエートは不明である。ただ、国営農場が農地面積では55.4%（2015年、以下同じ）と過半を占めているのに対して、農場数では32.3%にとどまっているとの統計はある。農地面積はともかくとして、農場数・担い手数としては協同組合農場が大きな割合を占めていることは間違いないだろう。ここでは、この連載の⑥（10月3日号）に登場した独立自営農民であるミゲル氏の「キューバ農業では生産にしても販売にしても協同組合と無関係でいることはあり得ない」とのコメントを紹介しておこう。

ところで協同組合農場は三つに分類されており、それぞれの特徴と歴史は異なる。CCSは自営農民が国から共同で融資を受けたり、農業資材や機械を共同で購入・使用したりするために組織された協同組合であり、革命直後に行われた第一次農業改革の際に設けられたものだ。CPAは自営農民が自分たちの土地や生産手段を持ち寄って、協同組合の所有としたもので、共同作業によって運営し、賃金や利潤は労働時間に応じて分配される。「ソ連化」が進行していた中、1977年から組織化が進んできた。

一方、経済危機を受けて1994年に誕生したUBPCは、大規模経営が困難となった国営農場を分割したもので、土地所有権は国に属しており、CPAとは性格が異なる。UBPCは協同組合農場とはいえ農民の自発的意思によって設立されたものではないこと、また社会主義国であるため、他の協同組合組織も含めて国家のコントロール下に置かれていることなど、協同組合のあり方や国家との関係など、基本的な課題を有していることを指摘しておく必要がある。そして規模の大きな組織ほど生産性が低いのが実情であり、国営農場やUBPC、CPAといった大規模農業形態は減少傾向にあり、CCSおよび個人農家が増加するなど、規模の問題が影響している。

◇協同組合化の推進

キューバでは2011年4月に、社会経済体制の抜本的転換を目指す「革命と党の社会経済政策基本方針」が公表され、新たな体制のための法整備は14年末までにほぼ終了し、15年からは本格的な実施段階

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

に入っている。

「全人民の所有制」と名付けられた新たな体制は、4部門からなっており、改革国有部門、外資部門、中小民間部門そして協同組合部門となっている。協同組合化は既に農業部門では進められてきていることから、新たに非農業部門での導入が意図されている。協同組合は3人以上集まれば作ることができ、15年6月時点では419の協同組合が設立され、「そのほぼ半分が食品の加工や販売であり、その他、衣類の縫製、バス輸送、会計士、コンピューター技術者など、職種は多彩である。といってもまだ始まったばかりであり、国も、協同組合員も、手探り状態にある」（後藤政子『キューバ現代史』247ページ）と報告されている。



小学校に掲げられた写真の右がホセ・マルティ、真ん中がゲバラ、左がカストロ

革命政権の樹立以降、医療費とともに教育の無償化を実現・徹底させると同時に、その質の向上に努めてきており、世界の学カランキングの1位は現在、キューバだという、ある国際機関の分析もある。長年にわたる教育の積み重ねが知的人材の育成・蓄積を可能にしてきたが、その成果として知的人材を生かしていくことが最重要の国家的課題であり、その活躍の場を提供していくのにふさわしい協同組合のあり方が本質的に問われてもいる。そもそも、1895年の第二次独立戦争で凶弾に倒れたキューバ革命の英雄の一人で、作家としても著名なホセ・マルティの社会理念は「すべての人々の幸せ、しかし、最も虐げられた人々の解放優先」「助け合いの社会」

を目指すものであり、キューバが目指してきた社会主義は協同組合との親和性が強く、農業以外の部門での協同組合活動も活発化していくことが期待される。

◆ハリナシミツバチの養蜂◆

キューバを含め、熱帯や亜熱帯地域に生息しているミツバチはハリナシミツバチが主である。その名のとおりハリは退化しており、刺されることがないため、作業で特段の防護服等の着用は不要。作業も楽で、ハリナシミツバチがかわいく感じられる。

ハバナ市の南東、カリブ海に突き出たサパタ半島にあるピオクワ村の兼業農家で独立自営農家であるレオネル氏は、40歳台後半。電気工事士として働いているが、併せて養蜂とバナナ、マンゴー、アボカド等の果樹や枝豆、ナス等の野菜を多品種少量生産している。またカイシモン、マンサーニア、ティロ、ミント等の薬草も育て、さらに馬を飼っており、仕事や遊びによく馬車を走らせている。彼が近年、力を入れてきたのが養蜂で、西洋ミツバチではなく、ハリナシミツバチを飼育している。ハリナシミツバチは樹の中、胴の部分に巣を作るが、樹から取り出した巣を自分で作った木製の巣箱に移して飼養する。蜜は西洋ミツバチの蜜よりも抗菌性が高く付加価値は高いものの、西洋ミツバチに比べて生産性に劣り、蜜の収集には時間・手間がかかる。



樹の中の空洞に巣をつくる



注射器のような器具を使つての採蜜

レオネル氏は巣箱を使つての養蜂の研究・実践をしながらその普及にも努めているが、恒常的に販売していくのに必要な量には達していないことから、自給用にとどまっており、生産がたまたま多すぎた時に協同組合に売ることがある程度だという。日本でもハリナシミツバチの蜜は珍重されているが、当分の間、輸出は難しいとしている。